

『八犬伝』 犬士列伝の構想に関する考察

— 『水滸伝』の受容を通して —

孫 琳 淨

はじめに

曲亭馬琴作『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』と略す）は、全九八巻一八〇回一〇六冊を数える。石川秀巳氏¹の区分に従えば、物語は大きく「発端」「犬士列伝」「八犬具足」「京師の話説」「大戦」「終結」の六部に分けることができる。「犬士列伝」部は、諸処に誕生した七犬士が遍歴を重ね、結城大法会に向かうまで（第二輯第一五回から第九輯上巻第九六回）と、素藤が安房を攻め、犬士・犬江親兵衛が鎮圧するまで（第九輯上巻第九七回から第九輯下巻之上第一二二回）を指す。

『八犬伝』の構想を論じた先行研究は多数認められるが、馬琴の作品外の発言に基づき、原文を詳細に検討することによって、『八犬伝』或いはその一部の構想の成立時期、変化、境界と、構想転回の意義を論じるものが目立つ²。

周知の如く、中国白話小説『水滸伝』は『八犬伝』の成立に大きな影響を及ぼした。にもかかわらず、『水滸伝』を端緒に『八犬伝』の構想を論究するものは、石川氏の「信乃の行動軌跡のまわりに、次々

と姿を現わし結集していく犬士たちの挿話を配するという構成は、或いは『水滸伝』の好漢たちが連鎖的に登場させられてくる行き方を模したものであるかもしれない³、『八犬伝』の〈発端—列伝—八犬具足—京師の話説—大戦〉という構成は〈楔子—列伝—梁山泊結集—招安—大戦〉の『水滸伝』の構成に倣った形になってもいる⁴と、徳田武氏の『水滸伝』では……連環体とでもいうべき形式を用いている。それは第一回で王進が主役となる話が語られ、王進は九紋龍史進と知り合う、第二回ではその史進を主役とする話が語られ、史進は魯智深と知り合う、すると第三回では魯智深が主役となる話が語られるという形式である。このようにして第七十回に至って百八人が梁山泊に集結するわけである。『八犬伝』でもこうした連環体が採用されている⁵に留まる。その上で、両氏ともに詳細な検討はされていない。

一 問題提起

筆者はこれまで、犬士犬田小文吾・犬坂毛野の列伝を対象に、『水滸伝』との具体的な比較検討を行った結果、次の四点の利用法の原則を明らかにした⁶。

〈二〉『水滸伝』の一節をいくつかの部分に分解して使用した場
合にも、基本的には同じ部分
を重複して用いないこと。

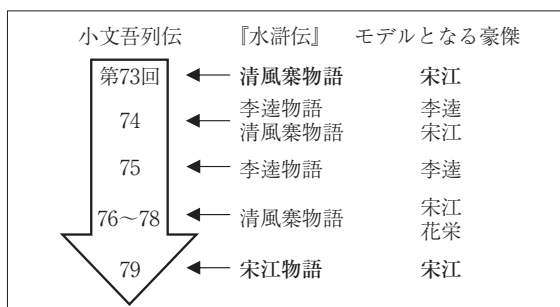
〈二〉犬士列伝の途中で犬士のモデ
ルとなる水滸豪傑が変わって
も、馬琴は終盤において、そ
れを最初のモデルとなる豪傑
に戻していること（【図1】を
参照）。

〈三〉『水滸伝』の類似する場面を
統合した上で、自作の趣旨に
合わせて選択していること。

〈四〉『水滸伝』に散在する水滸豪
傑の要素を繋げて利用していること。

つまり、『八犬伝』は『水滸伝』を漫然と取り入れているのではなく、
綿密な構想を立てた上で『水滸伝』を利用していることがわかる。

では、もしこれらの原則（とりわけ〈二〉）が犬士列伝全体におい
て適用されるのであれば、これを手がかりに、犬士列伝の構成ならび
に列伝全体の構想と『水滸伝』の関わりを浮かび上がらせることも可
能なのではなからうか。本稿では、個々の犬士列伝のそれぞれの構成、
特に【図1】に示されている物語の最初と最後を構成する外側の枠組
みと、犬士列伝に利用されている『水滸伝』物語の相互間の繋がりに



【図1】

着目し、『水滸伝』の犬士列伝の構想に与えた影響を検討したい。

二 各犬士列伝の構成と『水滸伝』の関わり

検討する前に、まず比較対象とする『水滸伝』の版本について簡単
に触れておく。

馬琴が初めて『水滸伝』の版本について意識的に言及したのは、『新
編水滸画伝』（初編一〇巻馬琴著、文化二年（一八〇五）から同四年
にかけて刊行された『水滸伝』の翻訳もの）の序文においてである。
執筆当初から天保二年（一八三一）九月、馬琴が一二〇回本『忠義水
滸全書』を入手するまでの期間に、彼は幾つかの『水滸伝』版本を借
覧したと見られるが、その中で、本文に省略がなく（いわゆる文繁本
『水滸伝』⁷）、かつ確実に最後まで通覧することが可能であったのは、
七〇回本の一本のみであると考えられる⁸。それゆえ本稿では、天保
二年九月以前に刊行された第七三回までの『八犬伝』を考察するには
七〇回本『水滸伝』⁹、それ以降に刊行された第七四回から第一二二
回までの『八犬伝』を考察するには一二〇回本『忠義水滸全書』¹⁰を
対象とする。

ただし、『水滸伝』の七〇回本と一二〇回本とは回数表記に一回分
のズレがあるため、回数表記は一二〇回本を基準とする。

二一 単一の『水滸伝』物語の利用

八犬士最初の登場人物犬塚信乃の大塚村での物語（信乃一度目の活
躍、以下「信乃Ⅰ（大塚村）」と称し、直後の芳流園から荒茅山まで

の物語を「信乃Ⅰ（芳流閣く荒茅山）」と称する）は馬琴が跋文（第一六回）に、

右犬塚信乃が列伝は、父祖のうへを詳にして、その他の事を省略す。是より下、七犬士の伝に至ては、家譜を省略して、只その人のうへを詳にするものあり。¹²

と書いているように、彼の祖父匠作の戦死から始まっている。あらずじは次のようである。

信乃の父番作が結城落城のとき、主家の宝刀村雨丸を抱いて脱出し、拈華庵に寄ったところ、図らずも許嫁の手束と出会う。番作は悪僧から手束を救い出したあと、庵を焼き払い、二人は一緒に信州筑摩に逃げる。三年後、故郷の大塚村に戻るが、異母姉の亀篠が既にならず者の墓六と一緒に、墓六に家督を継がせてしまっていた。姉夫婦は番作から村雨丸を巻き上げようと彼に迫り、病床の番作は村雨丸を息子の信乃に託して自害する。やがて亀篠夫婦は養女浜路と信乃の婚約を披露して信乃を引き取るが、二人を結婚させるつもりはない。新しい陣代簸上が浜路を見そめて結婚を申し込むと、墓六は信乃に対し、村雨丸を足利成氏朝臣に献上するようすすめ、彼が発する前日に、浪人左母二郎を利用して信乃の村雨丸を偽物にすり替える。信乃と亀篠家の小者額蔵（犬士莊助）が発したあと、左母二郎は浜路と本物の村雨丸を奪って円塚山に逃げ、浜路を斬り殺そうとしているところに、寂寞道人こと犬士道節が現れ、左母二郎を殺して村雨丸を奪う。その一部始終を見た莊助は刀を奪い返そうと道節に挑むが逃げら

れてしまふ。その一方で、大塚村では簸上が仲人の軍木を連れて、浜路を迎えに屋敷にやってくるが、亀篠夫婦はなかなか花嫁に会わせようとしない。問い詰めた結果、浜路が失踪したことが判明する。さらに亀篠夫婦が献上した刀が偽物であることを知って激怒した簸上は夫婦を惨殺するが、折しも戻ってきた莊助に現場を目撃される。莊助は主人の仇を討つため簸上を殺して、軍木に深手を負わせる。

「信乃Ⅰ（大塚村）」の冒頭部分（二重傍線部）が『水滸伝』第五・六回の魯智深物語と、第三一回の武松物語を利用していることは、既に麻生磯次氏¹³、土岐和美氏¹⁴により考証されているため再論しないが、ここでは主に「信乃Ⅰ（大塚村）」の末尾、浜婚簸上が花嫁浜路を迎える場面（二重傍線部）における『水滸伝』物語の利用を見てみたい。

まずは花嫁が花嫁を迎えに屋敷にやってくる場面である。『八犬伝』『水滸伝』ではそれぞれ次のように描かれている。

○：十九日の月高く昇て、今はや亥中になりしかば、陣代簸上宮六は、なかだちあめるでこばいじ 媠奴軍木五倍二と連拉て、つれだち 墓六許詣来にけり。各麻の上下なる、し 礼服を着たれども、しの 潜びやかなる婿人なれば、ともひと 従者をいとまじ 襲して、ひとりの 一個の奴隷に、あやうちん 挑燈を引提させて先に立せ、た 若党兩人、まじりとり 鞋奴兩人を従へつ、まうちん 且呼門せたりければ、けんは あるじ夫婦は今さらあんは に、あんは 周章てせんすべをしらず、けんは 龜篠は、けんは 勸盃の塩梅心もとなしとて、くらや いそしく庖湍に赴きて……ひきく 墓六は、いらへ 応々と答ながら、書

院の蠟燭を継かえて、帚はらとる手も戦たたかたる、そこら一遍掃はき出して、玄関なる式台へ、投なるが如く出迎いでむかい、「思ふにまして速すみなる来臨らいりん、いと辱かたじけなくこそ候へ。誘給へ。」と先にたちて、引ひて書院に赴むかひ、宮六・五倍ごばい二は会釈して、賓主ひんしゅの席むしう定さだりつ……待まつこと半晌許はんとうきかりにして、龜篠は、みづから洲浜の盃台を捧つ、……再三の鹿忽かめつつに愧はて……夫婦は冷き汗を流す、額を席薦たしなに掘埋ほりうめて、辞ことば弁ひしく勸解くわんげしかば、五倍ごばい二さへに胸むねくるしさに、執とりなすこと大かたならず……

○……太公見天色看看黒了、叫こ莊客前後點起燈燭熒煌……約莫初更時分、只聽得山邊鑼鳴鼓響。b 這劉太公懷着鬼胎、莊家們都捏着兩把汗、盡出莊門外看時……一簇人馬、飛遶莊上來……劉太公看見、便叫莊客大開莊門、前來迎接……a 小嘍囉頭巾邊亂插着野花、前面擺着四五對紅紗燈籠、照着馬上那箇大王怎生打扮、但見頭戴撮尖乾紅凹面巾……那大王來到莊前下了馬……c 劉太公慌忙親捧臺盞、斟下一杯好酒、跪在地下、衆莊客都跪着……劉太公把了下馬杯、來到打麥場上……那裏又飲了三杯、來到廳上(第五回)……劉太公は空が暗くなつてきたのを見て、莊客たちにあちこちに燈、蠟燭をまぶしいぐらいに点させ……およそ夜のふけ初めとおぼしき頃、聞けば山の方では銅鑼太鼓の音。b 劉太公は悪巧みを抱き、莊客たちはみな手に汗を握りつつ、一同屋敷の門外に出て眺めると……一群れの人馬が屋敷めがけて飛ぶように駆けてくる……劉太公がみると莊客たちに屋敷の門を大きく開かせ、前に進み出て迎える……a 子分たちの頭巾のふちには手当たり次第

に野の花が挿してある。前方に四五対の赤い紗の提灯が並べられ、馬上の親分を照らしている。その出で立ちいかにと眺めれば、頭には先つまみの真つ赤な中折れ頭巾を戴き……かの親分は屋敷の前まで来て馬から降りて……c 劉太公は慌てふためいて手ずから盃を捧げ持ち、よい酒を一杯注ぐと、地面に平伏し、莊客たちもみな平伏する……劉太公は下馬祝いの盃を差したあと、麦打ちの場まで来て……そこでまた三杯を飲んで、座敷へ通る……¹⁵

これを見るに、花嫁を迎えに屋敷にやってくる時刻、隊列の人数、規模には多少の異同が存在するものの、礼服で着飾って提灯を隊列の前に並べる様子(傍線部a)と、花嫁側の人間が後ろめたい気持ちを持ち(傍線部b)、花婿を恐れて恭しく盃(『八犬伝』では盃台、『水滸伝』では臺盞とする)を捧げる構成(傍線部c)は大体において一致するものである。

そして次は両作品の、花婿が屋敷に招かれたあとの描写である。

○……夏の夜なれば短くて、d はや子の時になりけり。しかはあれども浜路を出さず。五倍二類に焦燥しやうそうて、しばく催促せいきしてければ、夫婦はますく困こじ果て……浜路は甲夜より痞つか發りて、いかにとせんとすべなし……今霎しほ時待まちせ給へ。」と真ましやかに耳語みみごども、e 五倍二一切うけ引ひかず、「……新人の臥房ふしどへ案内し給へ……」と敦いそ閑またる、声おのづから高ければ……

○……d 大王上廳坐下、叫道丈人、我的夫人在那裏。太公道、便是

怕羞、不敢出來。大王笑道、且將酒來我與丈人回敬。^e 那大王把了一杯、便道我且和夫人厮見了、却來喫酒未遲。那劉太公……便道、老漢自引大王去。拏了燭臺、引着大王轉入屏風背後、直到新人房前（同前）……

∴ 親分が屋敷に入つて席に着き、大声を出して「舅どの、わしの奥方はどこにいる」と尋ねると、劉太公は「恥ずかしがつて、出て来ようとしません」と答える。親分が笑つて言う「まあ酒を持って来い、わしは舅どのに返杯だ」。^e かの親分は一杯をさしてから「わしはまず奥方と逢い、それから飲みに来てでも遅くない」と言い、劉太公は「わたくしが親分をご案内いたしましょう」と答え、燭台を持つて、親分を案内し、衝立の後ろに回り込み、花嫁の部屋の前まで来る……

宴会が始まつても花嫁の姿が見えず、待ちきれない花婿が理由を聞くと、婁六は「瘡發り」と、劉太公は「怕羞（恥ずかしがる）」と偽る（傍線部d）。言い訳の内容こそ異なるが、寢室に案内するよう命令されたことをきっかけに（傍線部e）、花嫁が居ない事実が露呈されるとの展開は類似する。

最後に、花婿とその僕らを成敗する場面を見ておこう。

○…額蔵^{がくざう}「吐嗟^{あはな}」と懸壅^{かけむさ}り……兩人が利腕を、楚^{しか}ととらへて動かす……逃^{にげ}んとした宮六^{きやうく}を、臙^{かたむね}より九の爺^{おや}の下まで、幹竹割^{かんちくわり}に砍^き殪^{たふ}し、返す刀に五倍^{ごばいじ}二が眉間^{みけん}を礮^{はた}と劈^{つぎ}けば、「苦^{あつ}」と叫^{さけび}て逃走^{たうそう}るを、

逃^{にげ}さじと追^おふ程に、^f 宮六^{きやうく}・五倍^{ごばいじ}二が從者^{じゆしや}等は、後の大刀^{おち}首^{くち}に驚^{おど}き覺^さて、庭門^{にはら}よる走り來つ、と見れば鏡上^{ひかみ}は既に撃^うたれて、軍木^{あゐ}は痛手^{いたて}を負^おつ、も、外面^{とつ}へ逃^{にげ}るとて、卷石^{まきいし}に礮^{はた}と墜^おち、向^{むか}ひ遙^{とほ}に転^か転^かびて、脱^{のが}るべくもあらざれば、^g 件の若党^{わくだん}兩人は、已^やこつを得^えず刀を抜^ぬ連れ、額蔵^{がくざう}を駈^{かけ}隔^へたり。そが間に兩^ひ三人なる、奴隸^{しもべ}は五倍^{ごばいじ}二を肩^{かた}に引^ひ被^かけ、或^{ある}は手を添^そえ、足を釣^つり、宿所^{しゆくじよ}を投^なげて逃^{にげ}去^さるにぞ……

○…魯智深^{ろしゆじん}喝道、教你認^{しん}的老婆^{らひや}。拖^ひ倒在^お牀邊^{しやうへん}、拳頭^{けんとう}脚尖^{けつせん}一齊^{いつせい}上^あ打^う得^え大王^{だいおう}叫^こ救人^{きうじん}……^f 却^か聽^き的裏^{うら}面^{めん}叫^こ救人^{きうじん}、太公^{たいこう}慌^{あわ}忙^{ばう}把^は着^し燈^{とう}燭^{じやく}、引^ひ了^り小^{せう}嘍^{ろう}囉^ら一齊^{いつせい}搶^{せう}將^{しやう}入^い來^き。衆^{しゆ}人^{じん}燈^{とう}下^げ打^う一^{いつ}看^{かん}時^じ、只^{ただ}見^み一箇^{いつ}胖^{ぽん}大^{だい}和尚^{わしやう}、赤^せ條^{じょう}條^{じょう}不^ふ着^{ちやく}一^{いつ}絲^し、騎^き翻^{はん}大^{だい}王^{わう}在^{ざい}牀^{じやう}面^{めん}前^{ぜん}打^う。^g 爲^ゐ頭^{とう}的^{てき}小^{せう}嘍^{ろう}囉^ら道^{どう}、你^{なん}衆^{しゆ}人^{じん}都^た來^き救^{きう}大^{だい}王^{わう}。衆^{しゆ}小^{せう}嘍^{ろう}囉^ら一齊^{いつせい}拖^ひ鎗^{せう}拽^え棒^{ぼう}打^う將^{しやう}入^い來^き……打^う鬧^{なう}裏^ら、那^な大^{だい}王^{わう}扒^ひ出^で房^{ぼう}門^{もん}、遶^に到^{たう}門^{もん}前^{ぜん}……騎^き着^{しやく}擗^へ馬^ば飛^ひ走^{そう}出^で得^え莊^{しやう}門^{もん}（同前）……魯智深^{ろしゆじん}が「女房^{にようぼう}がわかつたか」と怒^{いか}鳴^なりつげ、親分^{おんぶん}を寢台^{しんたい}のわきに引^ひき倒^{たお}し、拳骨^{けんこつ}、つま先^{つまさき}を一齊^{いつせい}に喰^くらわせば、親分^{おんぶん}はしきりに「助^{すけ}てくれ」と叫^こぶ……^f 中^{ちゆう}から助^{すけ}けの聲^{こゑ}が聞^きこえると、劉太公^{りうたいこう}は慌^{あわ}てて明^あかりを手にして、子分^{こぶん}を案内^{あんない}してなだれ込^こんだ。みな明^あかりの下^{した}でみると、一人^{ひとり}の太^たった和尚^{わしやう}が一糸^{いつし}纏^{まと}わぬ裸^{はだか}で親分^{おんぶん}に馬^ば乗^{のり}りになり、寢台^{しんたい}の前^{まへ}でやつつけている。^g 先^まに入^いつてきた子分^{こぶん}は「ものども、みな親分^{おんぶん}を助^{すけ}けに來^きい」と叫^こび、子分^{こぶん}たちみなが一齊^{いつせい}に槍^{やり}棒^{ぼう}をひきずつて殴^うり込^こむ……打^うつ間^ま、かの親分^{おんぶん}は部屋^{へや}の入り口^{ぐち}から這^はい出^でし、門前^{かどまへ}に駆^かけつげ……裸^{はだか}馬^ばにうち乗^{のり}り、飛^とぶように屋敷^{やしき}の門^{かど}を駆^かけ出^でした……

前掲のあらずじに述べたように、『八犬伝』では僕の莊助が許我から戻ってきて、ちょうど庄屋夫婦が花婿簾上に惨殺されるところに出くわし、主人の仇を討つため、莊助が簾上を殺して軍木に深手を負わせる。それに対し、『水滸伝』では豪傑の魯智深は劉太公の娘の寢室に待ち伏せして、入ってきた花婿の山賊を懲らしめる。莊助・魯智深の花婿を攻撃する直接的な原因は異なるが、両方とも花嫁が居なくなったことから引き起こされた事件である。その上、花婿の従者が刀の音に気づいて駆けつけ（傍線部f）、戦いに参加したおかげで、花婿が無事屋敷から逃走することができた部分（傍線部g）における、『八犬伝』との類似も一目瞭然であろう。

改めて「信乃Ⅰ（大塚村）」における『水滸伝』物語との類似をまとめると【表一】¹⁶ のようになる。『八犬伝』「信乃Ⅰ（大塚村）」には『水滸伝』の王進物語、林冲物語、江州物語など複数の水滸伝物語が盛り込まれているが、最初と最後は単一の物語・魯智深物語より構成されていることがうかがえる。

同様の方法で個々の犬士列伝と『水滸伝』を対照し、それぞれの列伝の最初と最後（ここでは「外枠」と称する）に利用されている水滸伝物語を列挙すると、【表二】¹⁷ の通りになる。

【表二】に見えるように「小文吾Ⅱ」「毛野Ⅱ」「毛野Ⅲ」を除けば、全ての犬士列伝は前述した「信乃Ⅰ（大塚村）」同様、物語の最初と最後が単一の水滸伝物語から構成されている。では「小文吾Ⅱ」「毛野Ⅱ」「毛野Ⅲ」はどうなっているのだろうか。「小文吾Ⅱ」を例に若干の補説を加えておく（「毛野Ⅲ」に利用されている東昌府物語につ

八犬伝		水滸伝	
列伝	物語	外枠	回 利用されている物語
信乃Ⅰ	大塚村	第15回	5・6 魯智深物語
		29	5・6 魯智深物語
		30	39 江州物語
小文吾Ⅰ （+毛野Ⅰ）	武州～対牛楼	51	41 江州物語
		52	23 武松物語
		58	31 武松物語
現八・ 大角Ⅰ	庚申山	59	23 武松物語
		67	24 武松物語
		68	44 石秀物語
信乃Ⅱ	甲斐	73	45 石秀物語
		73後半	33 清風寨物語（宋江）
		79前半	22 宋江物語
毛野Ⅱ	諏訪湖	79後半	16 生辰綱物語（楊志）
		82前半	11 楊志物語
		82後半	37 江州物語
現八・ 大角Ⅱ	穂北	86前半	41 江州物語
		86後半	5 魯智深物語
		87	61 盧俊義物語
毛野Ⅲ	湯嶋・鈴茂森物語	88	61 盧俊義物語
		92前半	70 東昌府物語・（張清）
		92後半	67 盧俊義物語
七犬士	五十子城	96	67 盧俊義物語
		97	101 王慶物語
		102	105 王慶物語
素藤		103前半	63 盧俊義物語
		103後半	62 盧俊義物語
		117	61 盧俊義物語
親兵衛Ⅰ	素藤討伐一回目	118	36 江州物語
		122	41 江州物語
		122	41 江州物語

【表二】

八犬伝		水滸伝		
回 列伝	『水滸伝』に類似する箇所	人物対応	類似箇所要約	
15	金蓮寺から逃げ出し祐華院に寄る	魯智深一番作	5 魯智深 6 魯智深	桃花山から逃げ出し瓦罐寺に寄る 瓦罐寺を焼き払う
		16	武松一番作	31 武松
17	番作が信乃に武笠を教える	王進一番作	2 王進	王進が史進に武笠を教える 高俅が王進を罰しようとする
		18	史進一信乃	2 王進
19	番作が自害する	王進一莊助	2 王進	廟に行くのと偽り荷物をまとめて逃走
		20	王進一莊助	2 王進
21	菩提院に赴く間、荷物が運び出される	王進一信乃	2 王進	璩英が実の両親を密かに恋しむ
		22	環英一派路	98 田虎
23	大塚村物語	環英一派路	98 田虎	駝馬屋敷の宴会
		24	環英一派路	98 田虎
25	頼助の婿入り話	林冲一信乃	10 林冲	邪魔者の林冲を片付けようとする計画
		26	林冲一信乃 林冲妻一派路	8 林冲
27	頼助の婿入り話	環英一派路	98 田虎	張教頭が結婚の申し入れを拒絶する
		28	環英一派路	98 田虎
29	頼助と道節の戦い	史進一節節 魯一莊助	6 魯智深 39 江州	魯智深と史進が林の中で戦う 詩詞を壁に書き付ける
		29	魯智深一莊助	5 魯智深

【表一】

いては注17を参照されたい)。

二二二 固定した一人の豪傑の活躍場面の利用

「小文吾Ⅱ」と『水滸伝』の詳細な比較は注6の拙稿において既に論じたため、ここではそれぞれの概要のみを挙げて簡単に述べたい(一重傍線は物語の冒頭部分、二重傍線は物語の末尾部分をそれぞれ表す)。

毛野を探しに再び旅に出た小文吾は次団太の宿屋に逗留する間、鬪牛祭りを見に行き、宿敵の船虫に発見される。船虫は偽按摩に扮して小文吾に近づき、怨みを晴らそうとするも捕らえられ、庚申堂の天井にぶら下げられる。通りかかった犬士莊助が事情を知らずに船虫を救い、家まで届けたところ、その仲間の盗賊らによる宿屋襲撃の計画を漏れ聞いた。小文吾とともに盗賊を退治したあと、老臣稲戸の屋敷に招待され、席につく瞬間逮捕される。しかし稲戸は二犬士を惜しんで偽首を差し出し、二人を密かに仏堂の下の穴藏に隠して逃した。

【表二】に示した通り、「小文吾Ⅱ」の冒頭第七三回後半と末尾第七九回前半は、それぞれ『水滸伝』第三三回清風寨物語、第二二回宋江物語を用いている。清風寨物語、宋江物語のあらずは次のようである。

○清風寨物語(一重傍線部は前掲「小文吾Ⅱ」の一重傍線部に対応する)

山賊王英が一人の婦人(花榮の同僚劉高の妻)を捕らえてきたが、宋江の説得により婦人は釈放され、数日後、宋江も山を離れて花榮を訪ねる。元宵節の夜、宋江は花榮の家人とともに灯笼祭りを見に出かけると、劉高の妻に見つけられ、強盗団の親玉として捕らえられる。激怒した花榮は力ずくで宋江を奪い返すが、再び逮捕される。その上、花榮自身も黄信の罠にはめられ、宴会の場で捕らわれる。

○宋江物語(二重傍線部は前掲「小文吾Ⅱ」の二重傍線部に対応する)

閻婆惜を殺したあと、宋江は難を逃れるため仏堂の地下の藏に隠れる。朱全と雷横が逮捕にやってきたが、朱全は宋江を見逃し、県に嘘の報告をする。

清風寨物語と宋江物語は別個の独立した物語ではあるが、「小文吾Ⅱ」の冒頭に利用されている「花榮の屋敷に逗留する」場面・「灯笼祭りを見に行く」場面(清風寨物語)と、末尾に利用されている「藏に隠れて難を逃れる」場面(宋江物語)は、どちらも宋江という一人の豪傑による活躍であることに留意すべきである。つまり「小文吾Ⅱ」の最初と最後は、「信乃Ⅰ(大塚村)」のように単一の水滸伝物語を用いたのではなく、固定した一人の豪傑が活躍する場面が利用されている(『表二』の括弧内の豪傑名は、当該豪傑の活躍場面が用いられていることを示す)。

では、個々の犬士列伝に利用されているこの幾つかの水滸伝物語を、列伝全体の構想という視点から見直すと、その間にどのような関係が認められるのであろうか。次に犬士列伝の内容を本筋と脇筋(詳細は

後述)に分け、それぞれに用いられている水滸伝物語は何であろうか、その水滸伝物語間にはどのような関わりがあるのかを考察したい。

三 水滸伝物語による犬士列伝の連環

前掲の徳田氏論考でも『八犬伝』の連環体について触れられていたが、氏は『八犬伝』の一人の犬士がもう一人の犬士を導き出す形を連環体と言ひ、『水滸伝』の手法を真似したという。確かにこれも『水滸伝』の『八犬伝』に与えた影響の一つと認められるが、筆者はさらにそれぞれの犬士列伝に利用されている水滸伝物語の変化に迫り、その背後から『水滸伝』と犬士列伝構想の関係を明らかにしたい。

【表三】は、『八犬伝』第三〇回から第六七回までの三つの犬士列伝(「信乃Ⅰ(芳流閣く荒芽山)」「小文吾Ⅰ(+毛野Ⅰ)」「現八・大角Ⅰ」と、水滸伝物語との類似箇所をまとめたものである(網掛け部分はそれぞれの列伝の本筋と思われる箇所)。具体的に検討してみよう。

三―Ⅰ 列伝Ⅰ―「信乃Ⅰ(芳流閣く荒芽山)」

大塚村に戻った莊助が書き付けのせいで断罪される一方、計我に赴く信乃は知らずに偽宝刀村雨丸を献上したため問者と疑われる。Ⅰ元獄吏の犬士現八と激闘の末、二人とも芳流閣から転げ落ちる。停泊していた小舟へと落ちた信乃・現八は、漂着した行徳の地で古那屋の主人文五兵衛に匿われたが、Ⅱ信乃が破傷風にかかり、現八は特效薬を探しに志婆浦に出発する。そこに、Ⅲ前小文吾に負けたことを根に持つ妹婿の山林房八が現れ、信乃の

血のついた麻衣をわざと小文吾に突きつけ、彼を挑発する。小文吾は信乃を庇うため房八と斬り合いになり、その弾みに房八は過つて息子の親兵衛を蹴り、妻の沼蘭を手につけ、さらに自分も小文吾に斬られる。が、なお撃ちかかる小文吾を止め、信乃を助けたい本心を明かす。Ⅲ房八夫婦の生き血を全身に浴びた信乃は全快し、莊助を迎えるため、現八・小文吾とともに大塚村に戻る。そこで初めて大塚村の異変を知り、Ⅳ庚申塚の刑場に乗り込み、Ⅴ莊助を救い出す。Ⅵ四犬士は戸田河に追い詰められたが、現れた老漁師の稽平とその息子力二郎・尺八の助力により、雷電の社頭に逃げ落ちる。荒芽山を目指して移動する道中、犬士道節が宝刀村雨丸をおとりに定正に接近して仇を討つところに出くわし、道節の一味と誤認され襲撃される。四犬士は苦戦しつつ荒芽山へ退くが、荒芽山の音音は稽平の妻であり、道節もここに匿われているため、Ⅶ定正の追手は直ちに音音の家を包囲する。稽平夫婦は家に火をつけ、五犬士は血路を開いて落ち延びる。

右のあらずじから見て取れるように、「信乃Ⅰ(芳流閣く荒芽山)」には犬士信乃のほか、犬士莊助・現八・小文吾・親兵衛・道節の登場場面もあるものの、いずれも信乃との関係上に出現した人物である。そのため、主役信乃を中心とする場面を本筋とし(一重傍線部に対応するが、そのうちさらに次に挙げる『水滸伝』江州物語と類似する箇所が見られる場合は二重傍線とし、番号「Ⅰ・Ⅱ」を付す)、それ以外の脇役を中心とする場面を脇筋と見なす(脇筋のうち犬士小文吾を中心とする部分のみ波線で示す)¹⁸。

八犬伝		水滸伝	
回	列伝	人物対応	物語
『水滸伝』に類似する箇所		類似箇所要約	
30	芳流閣	書き付けのせいで荘助が断罪される	39 江州 壁に書き付けた詩のせいで宋江が逮捕される
		御所に偽刀を献上して聞者と疑われる	7 林冲 林冲が偽刀を献上して聞者と疑われる
31	芳流閣	才能を忌んで信乃を拒む	11 林冲 才能を忌んで林冲を拒む
		芳流閣上の決戦（元獄吏の現八と信乃）	38 江州 李逵（獄吏）と張順の船上での戦い
32	古那屋の惨劇	小文吾号を得る（太丈という無頼漢を制裁する）	3 魯智深 鎮西を三拳で叩き殺す（原因・争う場面）
		楊志一小	12 楊志 牛二殺し（相手の描写・事件後の処理）
33	古那屋の惨劇	小文吾と房八の勝負	29 武松 蔣門神と施恩の勝負に遺恨がある話
		小文吾が密談に怒鳴り込んで驚かす	16 生辰綱 呉用が公孫勝と晁蓋の密談に怒鳴り込む
34	古那屋の惨劇	信乃が病気になる	2 王進 王進と母が史進家に宿をとり母が病気になる
		現八が信乃を救うため志違に出発する	39 江州 宋江が魚を食べ過ぎて病気になる
35	古那屋の惨劇	房八が小文吾を踏みつける	29 武松 武松が蔣門神を踏みつける
		房八が「離縁状」を突きつける	7 林冲 林冲が妻に離縁状を突きつける
36	古那屋の惨劇	房八が古那屋に乗り込み小文吾を挑発	29 武松 武松が蔣門神の店にて挑発する
		全身に血を浴びて病気を完治させる	39 江州 宋江が病氣と称して糞を全身にかぶる
37	信乃 I	偽首（房八の首）を以て信乃を助ける	40 江州 偽の手紙を以て宋江を助けようとしたが失敗
		法場	41 江州 戴宗から宋江が逮捕されたことを知る
41	信乃 I	精平から荘助が逮捕されたことを知る	39 江州 戴宗が拷問を受ける
		背介が拷問を受ける	40 江州 法場に乗り込み、宋江・戴宗を救出
42	信乃 I	法場に乗り込み、荘助を救出	40 江州 法場に乗り込み、宋江・戴宗を救出
		突然水から現れ、悪吏を水中に引き込む	19 晁蓋 阮小七が何港を水中に引き込む
43	信乃 I	精平と二人の息子の助けにより河を渡る	40 江州 小張義 張順・張横・李俊の船で河を渡る
		雷電の社頭に四大士小会同	40 江州 小張義 豪傑らが樺太公の屋敷を目指して移動
44	信乃 I	四大士荒茅山を目指す	7 林冲 名剣にまがなないことを嘆く
		名剣にまがなないことを嘆く	41 林冲 名刀をおとりに林冲を陥れる
45	信乃 I	村雨丸をおとりに定正を襲う	10 林冲 三人の首を断つて山神の供物臺に並べる
		父に首を手向けるため地蔵堂に入る	11 林冲 焚火の前での林冲と狂客の絡み
46	信乃 I	囲炉裏の前での道節と荘助の絡み	11 林冲 焚火の前での林冲と狂客の絡み
		荒茅山で襲撃され、屋敷が焼かれる	41 江州 黄文炳の屋敷を襲撃し、焼き払う
47	信乃 I	荒茅山の馬が鉄砲に撃たれる	23 李逵 虎殺し（殺し方）
		猪退治	43 武松 虎殺し（動作部分）
52	小文吾 I	悪女・船虫との出会い	27 武松 悪女と出会う（母夜叉孫二娘と出会う）
		恩を仇に（船虫・夫と小文吾）	43 李逵 悪女と出会う（李逵の妻と出会う）
53	小文吾 I	夫の死因を隠蔽	33 清風寨 恩を仇に（劉知寨の妻と宋江）
		船虫を村から石浜城に護送する	21 宋江 死因の隠蔽（閻婆惜殺し、計略にかける）
54	小文吾 I	護送途中、船虫が仲間により救出される	25 武松 死因の隠蔽（武大の死因を隠蔽）
		馬加郎に軟禁される	43 李逵 李逵を屋敷から役所に護送する
55	対牛楼の仇討ち	女田楽・旦開野と出会う	30 武松 張都監の屋敷に滞在するが、賊だと陥れられ、牢屋に入れられる
		旦開野が二人の刺客を殺す	31 武松 中秋節の宴会で小間使の玉蘭と出会う
56	対牛楼の仇討ち	対牛楼での首殺し	31 武松 武松が飛雲浦にて護送人二人を殺す
		馬加郎からの逃走（小文吾）	31 武松 鴛鴦樓での首殺し
57	対牛楼の仇討ち	馬加郎からの逃走（毛野）	61 盧俊義 鴛鴦樓からの逃走
		知り合いと出会う	31 武松 盧俊義が河を渡って逃走しようとする
58	対牛楼の仇討ち	知り合いと出会う	31 武松 張青夫婦と再会
		庚申山に登る前の麓の茶屋でのやりとり	23 武松 虎殺し（景陽岡に登る前酒屋でのやりとり）
59	現八山の妖猫退治	石秀一現八	46末 梁山泊に行く道中の酒屋でのやりとり
		李応一現八	47 祝家荘 李応は勧告を聞かずに一人で祝家荘に向かう
60	現八山の妖猫退治	洞窟の中で馬に乗った化け猫と遭遇、箭を以てその左目を射る。	47 祝家荘 祝彪が馬に乗って出てきて、箭を以て李応の肩を射る
		幽霊の一角と出会い、彼の息子を助けて恨みを晴らす依頼を受ける	26 武松 壁の隙間から馬に乗っている祝彪を覗き見る
61	現八山の妖猫退治	大角を訪れ、義兄弟であることを明かす	50 祝家荘 幽霊の武大が出てきて、不慮の死を武松に知らせる
		船虫が大角と雑衣の復讐を図る	24 武松 孫立が義兄弟を訪ねて祝家荘にやってくる
62	現八山の妖猫退治	偽一角の陰謀を暴くため屋敷に赴き、宿を乞うと偽って入れてもらう	47 祝家荘 宋江は一丈青を王英にめあわせる
		古刀鑑定のため、縁連が負傷した偽一角の屋敷を訪れ、古刀が突然消える	48 祝家荘 王婆が西門慶と潘金蓮の仲介となる
63	現八山の妖猫退治	古刀鑑定のため、縁連が負傷した偽一角の屋敷を訪れ、古刀が突然消える	48 祝家荘 道を探るため、柴売りに扮して村に潜入
		縁を仕掛けて現八を賊として暗殺しようとする	49 祝家荘 祝家荘を落とすため、孫立一味が中に潜入
64	現八山の妖猫退治	縁を仕掛けて現八を賊として暗殺しようとする	49 祝家荘 仲間入りを誘うため、宋江が負傷した李応の屋敷にいったが、対面を断られた
		船虫に迫られ、雑衣は自ら腹を引き裂く	46末 祝家荘 転げ落ちた虎をもらうため、解兄弟が毛太公を訪ねるが、虎が突然消える
65	現八山の妖猫退治	骨が証拠として真実が明かされる	46 石秀 時遷が雞を盗んだことが原因で喧嘩になり、巽にはめられ、逮捕される
		郷里が立会人となる	26 武松 楊雄が潘巧雲の腹を引き裂く
66	現八山の妖猫退治	郷里が立会人となる	26 武松 武松が潘金蓮の腹を引き裂く
		船虫が縁連を誘惑する	24 武松 骨が証拠として真実が明かされる
67	現八山の妖猫退治	船虫が縁連を誘惑する	24 武松 郷里が立会人となる
		船虫が縁連を誘惑する	24 武松 潘金蓮が武松を誘惑する

【表3】

冒頭の偽宝刀を献上して問者と疑われる場面を除き、【表三】に示したように、本筋であるⅠ芳流閣上の決戦、Ⅱ・Ⅲ宿屋での発病、Ⅳ・Ⅴ法場救出劇、Ⅵ荒茅山での決戦は、全て『水滸伝』の江州物語が参照されている。江州物語の梗概を簡単に述べておこう（傍線部と番号は前掲「信乃Ⅰ（芳流閣）荒茅山」と対応する）。

閻婆惜殺しの罪で流罪となった宋江は江州に到着すると、呉用に紹介された牢役人戴宗を訪ねる。そこに暴れ者の獄吏李逵が現れ、三人は一緒に酒宴を催すことになる。ところが酒楼には新鮮な魚がなく、Ⅰ李逵は魚を奪おうとして魚問屋の張順と船上で争い、ともに川に落ちてしまう。岸に上がると、宋江は張順に兄張横からの手紙を差し出し、李逵と張順を仲直りさせ、四人は一緒に酒を飲む。一方、Ⅱ宋江はこの日に魚を食べ過ぎたせいで病気になる、暫く病床につく。病気が治ったある日、宋江は酔った勢いで潯陽樓の壁に詩を書き付けたが、詩中に謀反の意図ありと考えた黄文炳は知事に注進し、宋江を捕らえようとする。Ⅲ戴宗は宋江を救うため、彼の全身に糞を被せて気が狂ったと偽ろうとしたが見破られ、宋江は逮捕される。処刑当日、Ⅳ梁山泊の豪傑らが法場に乗り込んで宋江を救い出し、Ⅴ白竜廟に逃げ落ちると、張順らの船と合流し、共に穆太公の屋敷に移動する。宋江の願いで、Ⅵ傑らは黄文炳の屋敷を襲撃して焼き払う。

Ⅳ・Ⅴにおける両作品の類似は先行論考にも指摘があるため再説しないが、問題なのはⅡ・Ⅲである。『水滸伝』の宋江が病気になること（Ⅱ）と、糞を全身にかけられること（Ⅲ）はそれぞれ別の事件で

あり、両者の間に連続性や因果関係は認められない。一方『八犬伝』では、信乃の病気（Ⅱ）を治すため、全身に血をかける（Ⅲ）という因果関係が成立しており、二つのエピソードが一つの事件にまとめられている。また、宋江・信乃それぞれの病気になった原因も異なる。これは『水滸伝』のⅡ・Ⅲの間の出来事―宋江が病気を治したあと潯陽樓の壁に詩を書き付け、その反詩のせいで逮捕令が下された―が、『八犬伝』冒頭の書き付けのせいで莊助が断罪される場面に使用されたからであろう。また魚を食べ過ぎて病気になることも、糞を全身にかぶせて気が狂ったと偽ることも犬士の行動として相応しくないため、馬琴がこのように書きかえたと推測される。さらに言えば、Ⅲ・Ⅵなどは『水滸伝』を逆方向にわざと捻って利用していることが見受けられる。

一方【表三】から読み取れるように、脇筋の中で小文吾に関連する部分、房八が小文吾に負けたことを根に持って彼の宿屋に押しかけ、挑発して勝負をかける話では、『水滸伝』第二九回の武松物語が利用されている。武松物語の詳細は、次節で論じることにする。

三―二 列伝二―「小文吾Ⅰ（十毛野Ⅰ）」

荒茅山での戦いを終え、^① 曳手・単節を探しに道を急ぐ小文吾の前に、手負いの大猪が現れた。小文吾は拳で猪を叩き殺して猟師の並四郎を救ったあと、すすめられるままその家に泊まる。^② 先に行った小文吾は、並四郎の女房船虫から周到なもてなしを受け、夜中、帰ってきた並四郎は小文吾の金を奪おうと彼を襲い、

逆に返り討ちにされてしまう。船虫は許しを乞い、家宝の尺八を小文吾に渡し、葬儀の手配と偽って出かけるが、実は小文吾を千葉家の尺八を盗んだ賊として村長に通報するためであった。やがて彼女と夫の罪が明らかになり、小文吾の潔白が証明される。その後、^③馬加は小文吾を自分の屋敷に監禁するが、彼を味方に付けようと宴会に招待し、小文吾はそこで女田楽の旦那野（犬士毛野）と出会う。^④旦那野は小文吾の代わりに馬加が派遣してきた二人の刺客を殺したため、^⑤小文吾は旦那野に嫁にすると約束する。次の夜、^⑥旦那野が対牛楼に乗り込み、馬加一家を皆殺しにし、小文吾に素姓を明かしたあと一緒に逃走するが、道中本意なく別れてしまい、^⑦小文吾は知り合いと再会する（一重傍線部分は本筋であること）。

「小文吾 I（+毛野 I）」は諸犬士列伝のうちでも稀な、『水滸伝』の痕跡が鮮明に残される箇所である。²⁰【表三】に見えるように、第五三・五四回の船虫を中心として描かれる脇筋部分を除けば、いずれも『水滸伝』の武松物語（第二三・二五・二七・三〇・三一回）が用いられている。武松物語の内容は次の通りである（前掲「信乃 I（芳流閣）荒茅山」には第二九回、後掲「現八・大角 I」には第二四・二六回武松物語が用いられているため、あわせて提示する。一重傍線部と番号〔①②…〕は「小文吾 I（+毛野 I）」の一重傍線部分、二重傍線部は「信乃 I（芳流閣）荒茅山」の波線部分、点線・波線・太線と番号〔A C…〕は次節に挙げる「現八・大角 I」の点線・波線・太線部分にそれぞれ対応する）。

柴進の家に身を寄せる武松は兄武大のことを心配して故郷に帰る途中、^A景陽岡の麓の酒屋に立ち寄り、大酒を飲んだ上、^C酒屋の主人の忠告を聞かずに一人で峠を越える。^①そこに人食い大虎が現れるが、武松は拳で虎を叩き殺し、その手柄によって県の都頭に任命され、兄とも再会する。兄の妻潘金蓮は突然現れた武松に一目惚れ、^M色気で誘惑するが拒絶される。武松が留守の間、^G隣の王婆の紹介で潘金蓮と西門慶の密通が始まり、二人の逢い引き現場に踏み込んだ武大は逆に毒殺されてしまった。帰還した武松は兄の死を怪しみつつ通夜をしていると、^E幽霊の武大が現れて、不慮の死の無念を訴える。葬儀屋に問いただしたところ、^K証拠品の黒い骨が渡される。四十九日の法事場で、^L近所の人を立会人として、^J武松は潘金蓮の胸をえぐり首を掻き切ったあと、西門慶を探しあて同じく首を切り落とし、兄の霊前に祀る。これを原因に流罪となった武松は護送中、^②酒屋の女主人孫二娘から周到なもてなしを受けるが、振る舞われた酒にしびれ葉が入っていることに気づいて、葉を飲んだふりをして倒れ、襲ってきた孫二娘を懲らしめる。そこに帰ってきた孫二娘の夫張青は許しを乞い、二人は義兄弟となる。孟州に到着すると、典獄の息子施恩から丁重に扱われるが、それは施恩がごろつきの蔣門神に負け店を奪われたことを恨み、武松に取り戻してもらうためである。武松は酔ったふりをして蔣門神の店に入ると、彼の妾を挑発して蹴飛ばし、そして蔣門神を探しあて、彼を懲らしめる。蔣門神は張団練を通じて張都監に働きかけ、^③武松を屋敷に招いて（武松

を張都監の配下にする)、^⑤ 召使いの玉蘭と婚約させる。しかしこれは罫であり、武松は賊として牢獄に繋かれ、流罪の判決を受ける。道中、^④ 蔣門神は二人の弟子を派遣して武松を殺そうとするが、逆に殺される。^⑥ 武松はそのまま張都監の家に引き返し、張都監・張団練・蔣門神と張都監一家を皆殺しにし、^⑦ 城壁を乗り越えて逃亡、張青夫婦と再会する。

「小文吾一(十毛野一)」の本筋となる①猪退治、②船虫夫婦との出会い、③監禁、④刺客殺し、⑤女田楽との婚約、⑥対牛楼での皆殺し、⑦逃走は、武松物語の虎殺し、孫二娘夫婦との出会い、張都監の屋敷に招待、護送人殺し、玉蘭との婚約、鴛鴦楼での皆殺し、逃走場面を全面的に借用していると思われる(詳細は注6の拙稿を参照されたい)。つまり、列伝一で脇筋として利用された『水滸伝』武松物語は、列伝二では本筋となっているのである。

三一三 列伝三一「現八・大角一」

【表三】から確認できるように、「現八・大角一」では主に『水滸伝』の祝家荘物語が用いられているが、所々に武松物語(前節参照)が織り込まれている。「現八・大角一」の概要は次の通りである(一重傍線は本筋を表す。本筋かつ後掲の『水滸伝』祝家荘物語と類似する箇所が認められる場合は二重傍線、前掲の武松物語と類似する箇所が認められる場合は太線、祝家荘物語と武松物語の両方と類似する箇所は点線にて示す。なお、波線部分は脇筋のうち、武松物語が利用されている箇所である(点線・波線・太線部分はそれぞれ前掲武松物語の点

線・波線・太線部分に対応する)。

荒茅山での敗北によってほかの犬士と離れ離れになった現八は、^A 庚申山の麓の茶屋に立ち寄り、^B 壁に武器が並べられているのを見て主人に尋ねたところ、化け猫と赤岩一角の話を聞かされる。^C 現八は主人の忠告を聞かず一人で山に分け入り、^D 洞窟の中で馬に乗っている化け猫に遭遇し、弓でその左目を射る。さらに登ると、^E 一角の亡霊に出会い、一角から自分は既に化け猫に食い殺され、今の一角は化け猫が扮した者であることを語られ、息子の大角を助けて恨みを晴らしてほしいと乞われる。^F 大角を訪ねて義兄弟であることを明かすと、^G 船虫が大角の元妻雛衣を連れて入り二人の復縁をすすめて帰っていった。^H 船虫の態度を怪しむ現八は、偽一角の陰謀を探るため彼の屋敷に赴くが、中に入ることができない。外で様子を伺っていたところ、偽一角の弟子に事情を尋ねられた現八は宿を乞いにきたと偽って中に通してもらう。^I 弟子らは現八との試合に悉く負けたことで彼の腕前を妬み、罫を仕掛けて賊として暗殺しようとしたが逃げられてしまった。逃走する現八を追って草庵にきた偽一角と船虫は、雛衣の胎児を眼薬にしようと雛衣に迫り、^J 雛衣が自分の腹を引き裂いたところ、傷口から飛び出した霊玉が偽一角に命中する。^K 現八は一角の幽霊からもらった骨を取り出し、大角に真実を明かしたあと、二人は一緒に偽一角を退治し、^L 郷里の人を立会人として、家財を処理してほかの犬士を探す旅に出る。一方、捕らわれた船虫は護送中、^M 色気を以て看守を欺いて逃げ去った。

対して、祝家莊物語は石秀の助力により楊雄が妻潘巧雲を裂き殺したあと、泥棒の時遷と出会い、三人が梁山泊を目指して移動するところから始まる。

A道中、宿屋に立ち寄り、B軒の下に武器があるのを見て主人に尋ねたところ、ここは祝家莊の管轄であることを知る。夜、I時遷が雞を盗んだことが原因で三人が店の人と喧嘩することになり、時遷は畏にはめられ逮捕される。時遷を救出するため、道を急ぐ二人は知り合いの杜興に会い、C話を聞いたその主人李忠は楊雄・石秀の勧告を聞かず自ら祝家莊へと向かい、時遷の返還を求め、D馬に乗って出てきた祝彪に射られて負傷してしまふ。楊雄と石秀はさらに梁山泊に登って助けを求める。H宋江は諸頭領を率いて祝家莊に向かうが、道が複雑であるため入ることができず、石秀と楊林に偵察を依頼する。二人は法師と柴売りに扮して中に入ったが、早速楊林が捕らわれ、D石秀は壁の隙間から馬に乗っている祝彪を見る。酒屋の老人の情報により、宋江らは二度の攻撃を仕掛けるが、二度とも撃退される。おりしも、F梁山泊入りを画策していた孫立・孫新一味が義兄弟を訪問すると偽って祝家莊に入る。梁山泊の石秀を生け捕りにし、信頼を得たところで祝家莊を裏切って内部から陥落させた。

「現八・大角I」の本筋においては武松物語の利用(K)も一部に見えるものの、概ね祝家莊物語(山の麓にある茶屋での出来事は武松物語とも類似するが、武器が並べられているなどの展開は祝家莊物語にしか認められない)が用いられていると思われる。特筆すべきは

H、大角を助けるため現八が偽一角の屋敷に赴く場面である。祝家莊物語とは趣旨こそ異なるが、①人を助けるため向かったこと、②近くにきたが中に入れないこと、③本名を隠して中に潜入し様子を探ることが共通する。また、D「馬に乗る化け猫を弓で射る」場面は、祝家莊物語の「馬に乗って出てきた祝彪に射られる」場面と、「隙間から馬に乗る祝彪を見る」場面をあわせた上で、内容を反転させて利用していると推察される。

「現八・大角I」の本筋に祝家莊物語が中心的に用いられる反面、脇筋には武松物語の要素が多用されることも大きな特徴である。例えば、E幽霊の一角が現れ、息子の救助と復讐を依頼する場面は、死んだ武大が現れ、不慮の死を知らせる場面と類似し、G「J船虫が雛衣と大角の復縁を図り、最後には雛衣が腹を引き裂いて落命したことは、王婆が潘金蓮と西門慶の密会を手引きし、最終的に潘金蓮が腹を引き裂かれて落命した」と近似する。ただ、馬琴は淫婦を貞女に捻ったのである。

ここで注意したいのが、「現八・大角I」の脇筋に多用される武松物語が、「小文吾I(+毛野I)」では本筋の中心的要素となっていた点である。すなわち、列伝二で本筋として利用される武松物語は、列伝三で脇筋として用いられているのである。

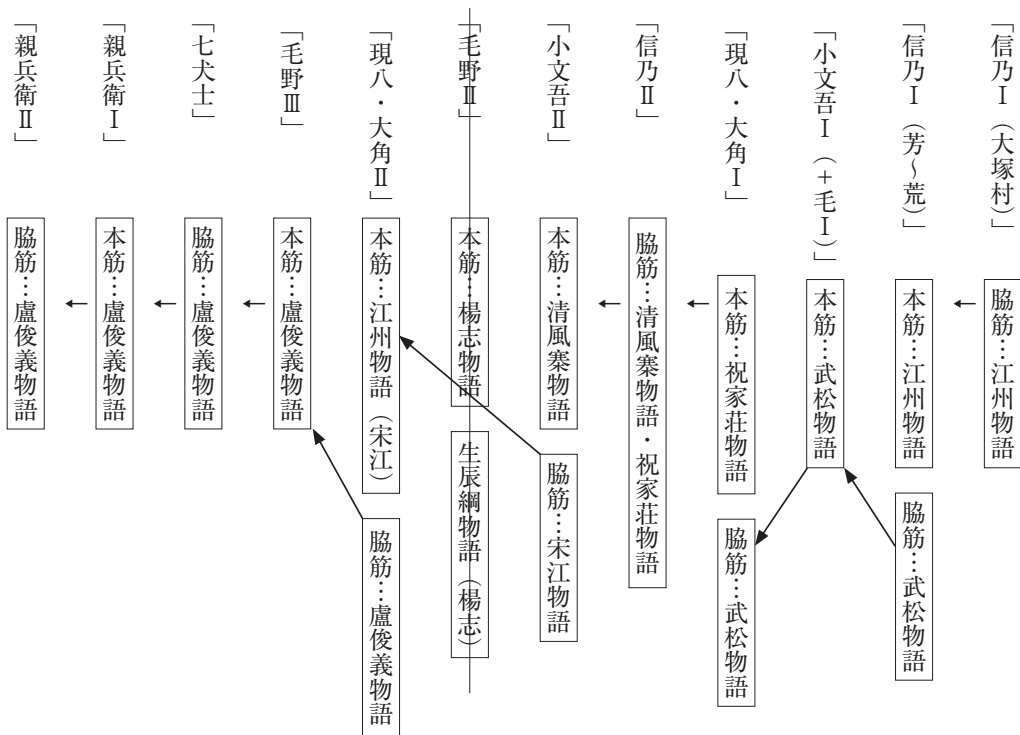
以上の検討によって導かれるのは、犬士列伝は『水滸伝』の特定の物語を繋ぎ役として利用することによって連結されているのではないかという仮説である。八人の犬士列伝を全て本筋・脇筋に分類した上で、それぞれに利用される水滸伝物語とその相互の関連を呈示すると

【表四】のようになる（犬士の活躍場面のみを示す）。

八犬伝		利用される水滸伝物語	
列伝	回数		
信乃Ⅰ (大塚村)	本筋	16~26	第2回王進、第7・8・10回林冲
	脇筋	15・29	第5・6回魯智深、第31回武松、 第39回江州
信乃Ⅰ (芳〜荒)	本筋	30・31・37~44	第7・10・11回林冲、 第38~41回江州
	脇筋	32・34・36・45~47・ 51	第7回林冲、 第29回武松
小文吾Ⅰ + (毛野Ⅰ)	本筋	52・53・55~58	第23・25・27・30・31回武松 (第43回李逵、第21回宋江)
	脇筋	54	第43回李逵、第61回盧俊義
現八・ 大角Ⅰ	本筋	59~62・64	第46末~48、50回祝家莊
	脇筋	60・62・63・65~67	第23・24・26回武松、第49回解兄弟
信乃Ⅱ	本筋	68~70	第44~46回石秀
	脇筋	71~73	第33・35回清風寨、45・46回石秀、 第50回祝家莊
小文吾Ⅱ	本筋	73・76~78	第32~34回清風寨
	脇筋	74・75・79	第22回宋江、第43回李逵
毛野Ⅱ	本筋	80~82	第11・12回楊志
	脇筋	79	第16・17回生辰綱(楊志)
現八・ 大角Ⅱ	本筋	82~84	第37回江州(宋江)
	脇筋	85・86	第65回盧俊義
毛野Ⅲ	本筋	88・89・91・92	第61・62回盧俊義、第70回 東昌府
	脇筋	90	第6・7回魯智深、第41回江州
七犬士	本筋	92・94	第69回東平府
	脇筋	93・95・96	第58~59回華山、 第67回盧俊義
親兵衛Ⅰ	本筋	103・104・107・ 109・110・115~117	第61・62・67回盧俊義、 第108回王慶
	脇筋	106・108・111~114	第53回公孫勝、第90・94回田虎、 第101・103・104・108回王慶
親兵衛Ⅱ	本筋	118・120~122	第36・37・41回江州
	脇筋	119	第66回盧俊義

【表四】

「↓」は水滸伝物語間の接続関係を表し、太字は「↓」によって連結されている物語である。端的に示すと、



という図式になる。『八犬伝』では、前の列伝で脇筋として利用される水滸伝物語が、次の列伝の本筋として利用され、前の列伝で本筋として利用される水滸伝物語が、次の列伝の脇筋となることがうかがわれる。換言すれば、ストーリーに独立性・完結性の強い個々の犬士列伝は、背景に存在する水滸伝物語により連環していることになる。ただ一つの例外「毛野Ⅱ」を除く。詳細は稿を改めて論じたい。

小結

『八犬伝』における中国小説の受容は多くの研究者により論じられており、『水滸伝』のほかに、『三国志演義』『西遊記』『封神演義』『捜神記』等の利用も指摘される。しかし、馬琴自身の記述、『八犬伝』の序跋文及び先行論考、注6の拙稿から、『八犬伝』に最も大きな影響を与えたのは『水滸伝』であることは明らかである。それゆえ、本稿では『水滸伝』との関わりのみを鍵として、犬士列伝の構成及び列伝全体の構想について検討を試みた。

これまでの考察から、個々の犬士列伝には複数の『水滸伝』要素が盛り込まれているが、各列伝の外枠は『水滸伝』の単一の物語か、固定した一人の豪傑が活躍する場面が用いられていることが明白となった。

また、八犬士列伝の内容を本筋・脇筋に分類した上で、それぞれに利用される水滸伝物語とその関連性を考察したところ、一見独立性・完結性の強い個々の犬士列伝は、一つの例外を除き、全て背景に存在する水滸伝物語によって連環していることが確認された。前の列伝で

本筋として利用される水滸伝物語が、次の列伝の脇筋として利用され、前の列伝で脇筋として利用されている水滸伝物語が、次の列伝の本筋となっていることは、前節に見たとおりである。つまり『水滸伝』が『八犬伝』に与えた影響は、一つ一つの犬士列伝の構成、ないし列伝全体の構想にまで深く及んでいるのである。

(注)

1 石川秀巳「(江戸の水滸伝)としての『南総里見八犬伝』」(『アジア遊学』131)『水滸伝の衝撃—東アジアにおける言語接触と文化受容—』勉誠出版 二〇一〇年三月) 一九六頁を参照。

2 板坂則子「『八犬伝』—構想よりの接近—」(『芸能と文学』井浦芳信博士華甲記念論文集』笠間書院 一九七七年十二月) 一九三頁、浜田啓介「『南総里見八犬伝』私見—八犬伝の構想に於ける対管領戦の意義」(『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会 一九九三年二月) 三五七頁及び、次の石川氏諸論考等が挙げられる。

- (1) 『八犬伝』 藤田素藤構想の意義—団円意義をめぐって—(『文芸研究』第99号 一九八二年一月)
- (2) 「八犬士列伝の新構想—『南総里見八犬伝』ノート」(『和洋女子大学紀要 文系編』第28号 一九八八年三月)
- (3) 「京師の話説」の構想—『南総里見八犬伝』ノート—(『和洋国文学研究』第26号 一九九一年三月)
- (4) 「団円構想の転回—『南総里見八犬伝』ノート」(『和洋女子大学

紀要 文系編」第31号 一九九一年三月)

(5) 「八犬士列伝構想をめぐる問題―『南総里見八犬伝』私論―」

(『国際文化研究科論集』第7号 一九九九年)

3 石川秀巳「八犬士列伝の構想―『南総里見八犬伝』ノート(三)」

(『日本文芸論稿』第12・13合併号 一九八三年七月) に拠る。

4 石川秀巳「『南総里見八犬伝』初期構想の成立」(『国際文化研究科論集』第17号 二〇〇九年) に拠る。「楔子」とは七〇回本『水滸伝』

にしか存在しない語であり、洪大尉が誤って伏魔殿に閉じ込められていた妖魔を解き放つ話を指すと思われる。七〇回本の詳細は後掲

注11を参照されたい。

5 徳田武「馬琴と中国小説」(日本の古典19『曲亭馬琴』集英社

一九八九年五月) 一三九頁に拠る。

6 拙稿「南総里見八犬伝」における『水滸伝』の受容―犬田小文吾を中心に―」(『和漢語文研究』第14号 二〇一六年一月)、『南

総里見八犬伝』における『水滸伝』の受容―犬坂毛野を中心に―」(『和漢語文研究』第17号 二〇一九年一月) を参照。

7 文章が簡略化されていない版本のことを指し、建陽で刊行されていた文章を簡略化したいわゆる文簡本と対応する呼び方である。

8 拙稿「石渠閣補刻本『忠義水滸伝』の日本における受容の一面―馬琴と北静廬を手がかりに―」(『中国文学報』第九十一冊

二〇一八年一〇月) を参照。

9 馬琴が閲覧した七〇回本は順治十四年序刊本と、雍正十二年序刊本の二種類だが、本稿では雍正十二年序刊本(京都大学附属図書館

蔵『第五才子書水滸伝』)を対象とする。

10 東京大学附属図書館蔵『忠義水滸全書』の画像を用いる。

11 七〇回本は金聖歎が一二〇回本の後半四割強(第七二回〜第八二〇回)、梁山泊が招安を受けて政府軍として戦って、大打撃を

受けたあと、宋江・盧俊義が朝廷の姦臣に毒殺される話を切り落とし、冒頭の引首と第一回を「楔子」の名に改め、以下一回ずつ回数

をずらしたものである。そのため、七〇回本は百回・一二〇回本との間に一回分の回数表記のズレがある。

12 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』(岩波文庫 一九九五年六月第四刷) に拠る。以下同様。

13 麻生磯次『江戸文学と中国文学』第三章「馬琴の読本に及せる支那文学の影響」(三省堂 一九五七年二月第三版) 一九一頁を参照。

14 土岐和美「読本における水滸伝の受容―『八犬伝』及び『八犬伝』以前の読本を中心に―」(『古典研究』一六 ノートルダム清心女子

大学国語国文学科 一九八九年七月) を参照。

15 現代日本語訳は吉川幸次郎・清水茂『完訳 水滸伝』(岩波書店 一九九八年一〇月) を参照(以下同様)。

16 両作品に対応関係が認められる場合は、『水滸伝』に類似する箇所・「類似箇所要約」にそれぞれの内容を示し、見られない場合或いは不明の場合は空白とする。「人物対応」は『水滸伝』の豪傑が『八

犬伝』の登場人物のモデルとなっていることを示したもので、人名が書き込まない場合は略称として(例えば魯智深は「魯」、小文吾

は「小」)示す。

17 犬士列伝の範囲は前掲石川氏論考と、高田衛『完本 八犬伝の

世界』（ちくま文芸文庫 二〇〇五年一月（二〇〇〇四〇四頁）、

水滸伝物語の範囲は小松謙氏のご教示に基づき設定したものであ

る。『水滸伝』の各部位が個人的活躍を主としている場合は「物語」

欄に個人の名前、個人の活躍ではない場合は、江州物語・清風寨物

語など地名によって名称を示す。

* 東昌府物語は新たな豪傑張清の活躍を中心とするが、盧俊義と燕

青の存在により、前出の盧俊義物語と僅かながら繋がっていると

言えよう。梁山泊の前首領・晁蓋が死ぬ際に、先に自分の仇を討つ

た人は次の首領であると言いつたが、宋江と盧俊義が譲り合っ

て、結局、東平府と東昌府を攻めて先に攻め落とした方が首領と

なることとなった。盧俊義は燕青を連れて東昌府攻めに行ったが、

小石投げの名人張清を相手に爲す術がなく、燕青は仲間を救うた

め、弩箭（毛野が持つ鐵砲と形が似ている）で張清の馬を仕留め

るが、張清は次々と小石を飛ばして豪傑らを撃つ。

18 前掲注17の高田氏論考二五三〜二五六頁を参照。

19 前掲注1石川氏論考、注13麻生氏論考と、水野稔「『南総里見

八犬伝』―作品鑑賞」（『日本の古典一九 曲亭馬琴』 集英社

一九八九年五月）等に指摘が見られる。

20 前掲注6拙稿「『南総里見八犬伝』における『水滸伝』の受容―

犬坂毛野を中心に―」に参照されたい。

（そん りんじょう

（二〇二〇年十月一日受理）
京都府立大学非常勤講師）

